

明治四十年四月一日創刊 令和八年一月一日 通巻第一、四二七号 (毎月一回発行)

# 和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会  
会長 間島 誉史秀

## 北海道神宮献詠 一月兼題 「始む」

ひたぶるに歌詠み教ふる師のあとを追はむと進むこの年始め

さまざまのことおこりたる年は去り年の始めの報鼓は響く

新しき手帳ひらきて書き始む孫の誕生日・結婚記念日

歌の師の病窓から見ゆるやも膨らみ始むる極月の月

まず鮭の鮭漬け仕込み終へたるよ我家の御せちはここより始めむ

「終活」の始めは何時と為すべきか古本ひと山今日も買ひ来て

書き留めた小さき幸に満たされり「三年日記」を始めて四年

阿で始まり咩の呼吸で鎮座する対の狛犬祈りを見守る

新しき年の始まり告ぐる音午前零時の開門太鼓

橘の曙覧にならひ「たのしみ」の歌づくりしがわが歌の始まり

おもむろに明け始むるは夜と年こころ新たに見ゆる日輪

長年の思ひ込めたる仕事なればまずは始めむ小さなメモから

## 一井美香先生選

選者 一井美香

会長 間島 誉史秀

副会長 今井 建

天位 大桃 小やゑ

地位 梶谷 久寿美

人位 信田 日裕

秀逸 西尾 知子

秀逸 垂水 真伸

秀逸 後藤 優美子

佳調 櫻谷 るみ

佳調 椿原 春香

佳調 南 貴子

移民増えインド人系の学校を「札幌に始まるか」と住民反対す

音もなく雪降る晩にナマハゲの荒ぶる声で年は始まる（秋田男鹿半島の年越し）

友からの香道の書の珍しきを借りて始まる笑ひかたりて

運動の代はりに始まる除雪なり足腰きたえ元気に暮らさむ

年明けて一年の計元日たり始めにとりくむ年賀状書き

始めまづ厳かな空氣に身を正し拍手の音を胸に響かす

AIならまた英会話を始まるかこころ決まらずまた年を越す

早朝の冴えて響けるレール音新しき年今ぞ始まる

来る春に仕事を始まる姪の子の人との出会いが良かれと祈る

一日の始めにかけるひと声は人なき居間に「おはようございます」

父を始めて一年たたぬに先生は抱っこが下手だとすぐに泣きをり

迷ひなし冬至に始まる一年を太陽と共に自然に生きむと

新しき布から始め刺繍する黙黙と刺す時間の楽し

興風会に入りて歌を始むれば想ひを記す難しさ知る

幼稚園バスの乗り場に向かふ子の手にごみ袋の今日の始まり

八尾師 絹子

門前 和幸

石川 弘子

室岡 和子

大湊 廣子

小川 紫織

小野 勇人

楽間 直之

宮城 涼

鎌田 憲子

片石 辰弥

窪田 明美

岩間 亜有加

鎌田 篤嗣

遠田 信之

## 総評

天位 (大桃小やゑ)

病床の村田俊秋先生を詠む。残念ながらご回復はかなわなかったが、ベッドから唯一見えたであろう月を配して「極月の月」と体言止めでまとめたのは巧みで美しい。ここには師を氣遣う深い思いがある。「やも」は万葉調の助詞。反語で多く使われるが、ここは詠嘆を含む疑問で「ゝかなあ」の意となる。

地位 (梶谷久寿美)

その家独特なものがある正月のお節。最近では買う人も増えたが、作者はあくまでも手作り派。まずは鮭の鮭漬けの仕込み。それを終えた。さあ次は…という新年を迎える準備への意気込みを感じさせる一首。三句切れも仕込み終わった喜びと次への勢いを感じさせる。

人位 (信田 日裕)

本好きには古本市はたまらない魅力だ。つい買い込んでしまう。でもそんなことをしては「終活」どころではない。「終活」をそろそろ始めなければと考えるでもないが、「今日も」ひと山本を買ってしまったのだという作者の思いがユーモアを込めて描かれる。「今日も」の「も」が効果的。これが初めてではないのである。

秀逸 (西尾 知子)

日記に何を書くかは人それぞれだろう。ついつい腹が立ったことや人の悪口、悔しさ情けなさを書くことも多い。作者は「小さき幸」を中心に書くという。そんな日記なら、後から読み返しても心地良い気持ちになるだろう。その「三年日記」を始めて四年になったということは、二冊めに入ったということになる。作者の日記を書く日々はまだまだ続く。

秀逸 (垂水 真伸)

三番目の兼題「狛犬」も含む巧みな歌。寺社を守護する狛犬や仁王が「阿」と「吽」の口の形をしていることはよく知られているが、ここではその対で立つ狛犬が人々の祈りの姿も見守っているとピタリと整えられて歌っている。

秀逸 (後藤優美子)

神宮では毎朝六時に打ち鳴らされる開門太鼓。しかし新年を迎える時は、一度閉められた門は午前零時に開門太鼓の音によって開かれる。初詣の人々が一斉に進み参拝する。そんな新旧の入れ替わる一瞬を太鼓の音ですっきりとまとめた一首。

佳調 (櫻谷 るみ)

橘曙覧は幕末期の歌人・学者。「樂しみは時」の形で自らのささやかな樂しみを歌った五十二首の連作「独楽吟」は有名。それを読み、参考にして自分なりの樂しみの歌を作ったのが歌作りの始めだという。それは楽しく、また幸せな短歌生活のスタートと言えるだろう。

佳調 (南 貴子)

この「仕事」が、長年思いを込めて続けてきた仕事なのか。それとも長年願っていたやと就けた仕事なのかはわからない。ただ、前者の気がする。下の句の「まずは始めむ小さなメモから」には、その慣れた「仕事」であっても、小さくてもきちんとメモを取って次に生かすのだという前向きな意志が表わされている。四句五句の倒置も効いている。

佳調 (椿原 春香)

夜も年も次に入れ替わること。「明ける」と言う、という気づきがこの歌の底にある。ゆつくりと夜が明け始めた、それがそのまま新しい年が明けたということなのだと、意識して昇る日を見れば、まさに「日輪」というべき神々しい太陽に見えたというのだ。やや硬い歌いぶりではあるが、言葉をよく考えて選んでいることが伝わってくる一首。

## 札幌興風会 一月兼題(一)

## 「暁」

## 一井美香先生選

暁に薄紅色の雲を見上げ踵は確と霜柱踏む

天位 西尾 知子

評 早朝の散歩を視線の動きで巧みに描いた。見上げれば朝日に染まる薄紅色の雲、足には霜柱を踏む感触。まさに晩秋の景。それをすつきりとまとめあげた一首。

暁を待てず空腹に目覚めけり病院の夕食五時にてあれば(四月、突然半月の入院)

地位 信 田 日 裕

評 入院中の夕食時間は五時と早い。消灯九時以降は長い夜が来る。そこで夜明けを待てず空腹に目が覚めてしまったなあ、というのである。この「けり」は詠嘆。日常の生活リズムとは違う病院での生活をわかりやすくよくまとめている。

暁に鳴くニワトリの声をきき始まりし朝を想ひて卵割る

人位 大 桃 小やゑ

評 昔は鶏を飼う家は多かった。作者の家か近隣の家かはわからないが、暁に鳴く鶏の声を聞いて朝が始まった。その卵を取りに行くのは子供の役割だったりもした。この歌は四句までが過去の回想、それを思つて今作者は卵を割るのだという巧みさが光る。

暁のサイレンの音国道ゆくぐもり聞こゆ雪ふりをるや

秀逸 櫻 谷 る み

暁の海に響けるウミネコの声に小樽の街は目覚むる

秀逸 片 石 辰 弥

暁の富士の掛軸掛けるべき床の間の無きを父に詫び居ぬ

秀逸 梶 谷 久寿美

暁に起き出て北に旅に出る想ひ溢るる街を目指して

佳調 宮 城 涼

暁天の風にそよげる花卉雪居明かししたる甲斐ありと思ふ

佳調 椿 原 春 香

暁のスーパークラムイに乗りて行く月の二十日の興風会よ

佳調 室 岡 和 子

暁よりバスでゆつたり二時間で紅葉の日光二荒山神社へ

窓をあけ暁の光いつぱいに全身に受け祈り続けむ

暁の駅前広場は白みゆき出陣の靴音は高まる

暁に会費納めに社務所まで年始あるある毎年のこと

長い夜に暁を待つ師走なりあとひと月よ吾子の受験まで

歩みをばふり返りての暁はまよめの歳に慶びとなりぬ（八十三才）

日本の暁担ふ女性の首相巳年に生まれ丙午を駆く

寝つかれぬ夜にあきらめ刺繍して一夜そのまま暁をむかふ

暁に寝ぼけた吾子の笑ひ声安らかな顔に二度寝するなり

## 札幌興風会 一月兼題(二) 「狛犬」

一井美香先生選

狛犬を怪獣と言ひし吾子は今かく礼して通る六歳

天位 遠田 信之

評 狛犬を怪獣とみなして怖がつたり叫んだりしていた息子は今六歳。軽くお辞儀だけをして通り過ぎるようになった。その成長は喜ばしいが、寂しくもある父の心情が具体的な描写の中で浮かびあがってくる。

勇払の寂れた神社の狛犬にも賽銭おかるる日ノ本の国

地位 片石 辰弥

評 「勇払の寂れた神社」がどこなのかは作者は記さないが、充分イメージは伝わる。その参拝する者も少なそうな神社の狛犬にも賽銭を置いてある日本国と誇りをもって描く。

朝なさな穂多木神社の狛犬を撫づるひとゐてわれも従ふ

人位 櫻谷 るみ

評 穂多木神社の狛犬はブロンズ製で精悍な顔をしている。それを毎朝撫でてゆく人がいる。その静かなたたずまいに作者もまねしてみたというのである。素直でつつましかな信仰が描かれている。

八尾師 絹子

大潟 廣子

小野 勇人

後藤 優美子

南 貴子

鎌田 憲子

窪田 明美

岩間 亜有加

遠田 信之

楽しげな穂多木神社の狛犬よ阿吽のなかにわれも包まる

狛犬で除けたい魔物は見え難い真の友さえ敵視をする愚（国際関係の闇と罫）

禊するそばに佇む狛犬と想ひはひとつ清きを守る

京都御所前和氣清麻呂の護王神社狛犬はおらず猪鎮座す

寒さ増すほどに靈力強まれり境内で迎ふる氷の狛犬

狛犬に着せたる衣に雪重ね境内しんとただ見守れり

狛犬は喜劇と悲劇をみておるか阿々と笑ひて吽と悲しむ

狛犬を辞書にて引くに魔よけとや神様も魔をよけたくあるや

みぞぎ場のすぐそばにいる狛犬よさざれ石会の守り神なる

福井産笏谷石の狛犬が弁財船の航路に残る

無礼にも大きな鼻の狛犬があひの女性に見え頭から去らず

初詣狛犬に会ひひとりでに「狛犬さんウン・ワン」と呟く

遠野にて会ひたき見たきもの二つ座敷わらしと河童の狛犬（緑風荘と常堅寺）

真白くて冷たき冬のわたぼうしかぶる狛犬何を思うや

秀逸 大桃 小やゑ

秀逸 宮城 涼

秀逸 窪田 明美

佳調 八尾師 絹子

佳調 南 貴子

佳調 鎌田 篤嗣

西尾 知子

室岡 和子

大潟 廣子

後藤 優美子

小野 勇人

梶谷 久寿美

信田 日裕

岩間 亜有加

## 札幌興風会 一月兼題(三) 「雑詠」

一井美香先生選

年賀状辞退通知の友多し我続けたし筆持てる間は

天位 梶谷 久寿美

新刊に心躍らせめくる手の早くなりたる冬日向のもと(天氣の良い休日、自宅にて)

地位 椿原 春香

冬空の三日月剥がしてシールにすれば夫<sup>つま</sup>への手紙届くやにあらん

人位 窪田 明美

車道より一直線に北キツネ足跡のこして我が家に來たる

秀逸 室岡 和子

ついにきたバス停に立つ冬の朝熊出でくると歩くをとめられ

秀逸 大潟 廣子

(ラジオ体操のため歩いていたが熊出現で歩いていけず)

ボロ市で愛犬に似た絵を見つけリビングの壁にまた犬が増え

佳調 小野 勇人

植物の色づけるは神のもと人の色づけ心とともに

佳調 鎌田 憲子

人生を背負ってゐるかのやうに腰曲げてゆくランドセルの児

秀逸 大桃 小やゑ

飼犬は死にて小さな箱になる見つめる父のまなざしの寂し

佳調 岩間 亜有加

霜降の頃春菊青青旨み増しごま和へ・天ぷら鍋するもよし

八尾師 絹子

幾日も苦吟すれども成らぬ歌ふと出合ひたる言葉のうれしき

石川 弘子

急かされて冬至間近の日は暮れる人の仕組んだ暦の故か

宮城 涼

点数は足らぬが笑顔は多き吾子そのままに行け道は開けむ

南 貴子

流感で自室に三日籠る我に会ひて別れに泣く子<sup>かな</sup>の愛し

遠田 信之



## 会のたより

令和八年の初春も皆様方におかれましては益々ご健勝にてお迎えのこととお慶び申し上げます。本年も何卒、宜しくお願い申し上げます。

●十二月二十日（土）十時、本殿にて句祭並興風会献詠祭が斎行されました。その後、慶陽館二階あすなろの間に十一時から歌会を行いました。

【出席者】一井先生、間島会長、今井副会長、石川、大潟、大桃、鎌田、窪田、坂本、櫻谷、椿原、西尾、八尾師各会員、事務局の垂水、片石、鎌田各権禰宜、岩間事務員の以上十七名。

## ●点者交代のお知らせ

このたび、村田俊秋先生のご推薦により、一井美香先生が点者に就任することになりました。これからも楽しく充実した会になることを願いまして、ご指導宜しくお願い致します。

《一井美香先生 略歴》

昭和三十三年 八雲町生まれ

昭和五十六年 藤女子大学文学部国文学科卒業

同年 北海道紋別北高等学校教諭

平成元年 北海道釧路北高等学校教諭

平成十九年 北海道釧路明輝高等学校教諭

平成二十年 北海道札幌啓成高等学校教諭

平成二十一年 高文連新聞専門事務局長

令和二年 原始林入会 編集委員

## ●逝去のお知らせ

長い間、当会の点者として力を尽くしてくださった村田俊秋先生が、十二月二十七日にご逝去されました。平成十一年一月のご就任以来、二十六年もの長きに亘り、深いご見識と優しいお心で私たちを導いてくださいましたこと、心より感謝申し上げます。先生のご功績を偲び、心よりご冥福をお祈り致します。

《村田俊秋先生 略歴》

昭和九年十月十一日生まれ。短歌結社「原始林」選者、北海道歌人会委員、北海道文学館理事。

昭和三十四年 國學院大学文学部國分学科卒業  
同年 北海道立標茶高等学校教諭

昭和四十年 北海道立小樽水産高等学校教諭

昭和六十年 北海道立札幌稲雲高等学校教諭

平成六年 私立山の手高等学校講師

平成十一年 北海道神宮札幌興風会点者

ここに故人様を偲び、短歌をご紹介します。

地ふぶきの過ぎたるつかのま雪原の

起伏をなして光れるが見ゆ

（平成十一年一月献詠「光」・最初の出詠）

冬の朝に立てるボブラより生まれある

その静寂に身のひとつ揺る

（歌集「興風」八巻掲載）

うつ蟬は冬の木の幹に動かざる

いのちをしかと継ぎ終へてのちの

（令和三年十二月献詠「継ぐ」）

卒寿越え白寿百寿に向かはむか

極月の夜に青ざかな食ふ

（令和六年十二月献詠「極む・窮む」）

弓取が弓もて土俵を掃く技よ

祓なるべしと心ただすなり

（令和七年十二月献詠「祓ふ」・最後の出詠）

（事務局・垂水）

## 令和八年二月兼題

一、北海道神宮献詠 「積む」

二、札幌興風会兼題 (一)「鳥」

〃 (二)「写真」

〃 (三)「雑詠」

※締切り 一月二十五日（日）必着

三、明治神宮献詠 「凍」

※未発表歌厳守。締切は毎月十日ですのでご注意ください。  
所定の様式にて各自の発送となります。

〒〇六四・八五〇五

札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地北海道神宮社務所内

札幌興風会事務局

電話 〇一一(六二)〇二六一

発行人 間島 誉史秀

編集人 垂水 真伸

印刷人 白馬堂印刷(株)